



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3835号 2017.8.14 発行

障害者アート展 個性光る作品ずらり 尼崎で19日まで /兵庫

毎日新聞 2017年8月14日
会場を訪れ、自らが制作に参加した作品を前に笑顔をみせる来場者=兵庫県尼崎市南塚口町3のピッコロシアター1階展示室で、高尾具成撮影



尼崎市内の通所授産施設を利用する知的障害者らのアート作品が集う「ぼくのおもいわたしのねがい〜みんなの作品展〜」が13日、尼崎市南塚口町3のピッコロシアター1階展示室で始まった。知

的障害や身体障害を持つ施設利用者が表現した絵画や書道、陶芸などの個人作品、協力して制作された団体作品など100点以上が展示されている。

ユニバーサルマップ作り 住みやすい街、市民の手で 情報収集、きめ細かく 大東 /

大阪 毎日新聞 2017年8月14日
スロープの幅を測る「ユニバーサルマップ」の調査メンバーたち=大阪府大東市で、金志尚撮影

「障害者の外出に」市内の会社発案
飲食店などのバリアフリー環境を紹介した「ユニバーサルマップ」の作製が大東市で進んでいる。障害者の外出に役立ててもらおうと、福祉製品の製造などを手がける「川村義肢」（同市御領）が発案。地元大学生らの協力も得ながら店舗数の多い鉄道駅周辺の情報を収集し、完成した



マップを障害者団体などに配布している。【金志尚】

家族の化学反応を 映画「幼な子われらに生まれ」 監督 三島 有紀子

大阪日日新聞 2017年8月13日



不器用さが魅力的に
「家族のドラマのラストは、そのまま続くのか誰にも分からない」と話す三島有紀子監督＝大阪市内
浅野忠信(右)と田中麗奈(C)2016「幼な子われらに生まれ」製作委員会

NHK出身でテレビのドキュメンタリー畑から映画に転身し活躍している三島有紀子



監督の新作「幼な子われらに生まれ」(ファントム・フィルム配給)が26日から、テアトル梅田、シネマート心斎橋で公開される。家族の葛藤を描いた作品で「生き方の不器用さが魅力的で、その化学反応を見てほしい」という三島監督に話を聞いた。

三島監督は大阪市出身で神戸女学院大学を卒業後、NHKに入局。「トップランナー」などのドキュメンタリー番組を担当したが、かねて志望していたという映画監督に転身するため2003年に独立しフリーの助監督をやりながら脚本修業に没頭。09年に劇映画「刺青～匂ひ月のごとく～」で監督デビューし、原田知世・大泉洋主演の「しあわせのパン」(12年)で業界の第一線に躍り出た。

その後、「ぶどうのなみだ」「繕い裁つ人」「少女」などを発表し、エンタメ志向を持つアート系監督として評価を高めている。そんな三島監督が「しあわせのパン」を撮り終えたころ、「尊敬する脚本家だった荒井晴彦さんに会うことができ、映画の話をしたとき、直木賞作家の重松清さんの原作である『幼な子われら』の映画化を勧められた」

荒井といえば寺島のぶ・大森南朋主演の「ヴァイブレータ」などキネマ旬報脚本賞を通算5度受賞している実力派の長老。「荒井さんが重松さんの原作を読んだのが21年前で、その時、まだ当時新人だった重松さんと映画化の約束をして、これまで実現していないという企画だった」

主人公のサラリーマン・田中信(浅野忠信)は、4年前に2人の子持ち女性の奈苗(田中麗奈)と再婚し、電車駅から斜行エレベーターで直結した団地(兵庫県西宮市で撮影)で暮らしている。「信には前妻の友佳(寺島のぶ)がいて、彼女も子どもを連れて別の男と再婚。信は血のつながっていない娘2人と暮らし、血のつながった娘とは離れて暮らしている。自分と同じような40代の大人たちが不器用だけど、魅力的に見えた」

しかし嫁の奈苗が妊娠し、信は会社で出向リストに載り、長女の薫から「本当の父親に会いたい」と告げられる。薫の実父は遊び人風の沢田(宮藤官九郎)で、奈苗は夫とDVで別れたという経緯がある。「みんな家族の中で息苦しく生きているのに、沢田だけは妻子と別れ自由に暮らしており、娘が会いたがっていると聞いても、『俺は関係ない』と言う。そんな沢田に共感する気持ちもあったが、みんながよくなるにはどうすればいいか。荒井脚本はあるのだけど、撮影現場で、頭を巡らすことになった」

浅野、田中、寺島、宮藤という演技派の熟演も大きい。「寺島さんのセリフに浅野さんが反応して、アドリブで出て来た言葉に、私は鳥肌が立った。ずっと主人公と一緒に悩んで芝居に臨んでいた浅野さんのそれが一つの回答だった気がした。子役の人も含めて家族を演じた俳優さんたちの化学反応を見てください」

自然とふれあい成長を 京都の夫婦、施設開設へ

京都新聞 2017年8月14日

京都府宇治田原町禅定寺に暮らす障害者施設職員の若林武さん（32）と妻の純さん（34）が、自然の中で子どもたちが自ら学んで成長する「森のようちえん」を同町につくる準備を進めている。来春開設の予定で、「自然いっぱい宇治田原全体を園舎にしたい」と



意気込んでいる。

「森のようちえん」の開設に向けて準備を進める若林武さん（左）と妻の純さん＝宇治田原町禅定寺

2人はそれぞれ保育士と幼稚園教諭の経験があり、自然豊かな地で幼児がのびのび遊べる環境をつくろうと、今春に宇治市から移住した。

「森のようちえん」は、子どもの自主性を重んじ、屋外で自然と触れ合いながら知性や体力、感性、人間性を育てていくことを目指す。岐阜県から全国に広がり、全国の幼稚園や保育園、任意団体などが賛同して取り組んで

いる。

2人は長野県の団体の研修に参加して共感、開設を決意した。来年4月から「里山保育わたぼうし」として自宅や庭を拠点に3～5歳児を平日の日中に受け入れる計画。現在は準備活動として、親子で田原川沿いを散歩したり、里山で遊んだりする「おさんぽ会」を開くなどしている。

純さんは「虫を見つけたり、花をつんだり、自然の遊びは時間がいくらあっても足りない。応援してくれる地域の人たちと関わりを深める場所にしたい」と話している。

【ビジネスの裏側】「LGBTフレンドリー住宅」表示を追加 情報サイトSUUMO、住まい探しの負担軽減へ

産経新聞 2017年8月14日

住宅・不動産情報サイトの「SUUMO（スーモ）」が、性的少数者（LGBT）の受け入れに積極的な賃貸住宅を簡単に探せるサービスを9月から始める。良い物件が見つかってLGBTだと告げると入居を断られるといった問題を減らすためだ。ただ偏見は残っており、サイトを運営するリクルート住まいカンパニー（東京都中央区）は物件のオーナー向け勉強会なども合わせて行う。（阿部佐知子）

LGBTというだけで…

スーモでは、エリアや家賃、専有面積、角部屋、ペット相談可といった項目をチェックすることで物件を絞り



込むことができる。今回この検索項目に新たに「LGBTフレンドリー」を追加する。

「LGBTであることを理由として、入居の相談や入居自体をお断りすることはない」という賃貸住宅をデータベース化。社内でのダイバーシティ（多様性）についての研修などを通じて、LGBTについて学んだ社員が発案した。

同社は今年4月、インターネットを通じてLGBT191人を対象に、住まい探しに関するアンケートを実施。それによると、同性カップルの41・9%が「単身契約した部屋に内緒で2人で入居した」と答え、「兄弟姉妹など関係性をごまかして入居した」人も37・9%いた。「同性同士であることを理由に入居を断られた」のは7・1%で、「書類上の性別と外見とのギャップを理由に入居を断られた」人も15%いた。

また「抵抗があるのも分かるので、あらかじめ入居の可否を明記してほしい」という回答もあり、サイトの改良につながった。

一方で、同性カップルは親族と同等だと認める動きは相次いでいる。東京都渋谷区、兵庫県宝塚市、那覇市などでは、同性のカップルに婚姻関係の代わりとなるパートナーとしての証明書を交付。那覇市などでは、同性カップルの公営住宅への入居を認めている。

証明書に法的な効力はないが、取得したカップルには家族向けサービスを提供する事業者も増えている。例えば、みずほ銀行は、渋谷区が発行する証明書を取得したカップルには住宅ローンでの「家族ペア返済」や「収入合算」を適用。ほかの分野でも、家族割引サービスの利用や病院での面会といったことが可能になってきた。

ただ、先のアンケートでは『男性同士の入居は難しい』と、何件もの不動産会社で言われた」との体験談も寄せられた。賃貸住宅のオーナーには高齢者も多いためか、LGBTへの理解はあまり進んでいないようだ。このため、リクルート住まいカンパニーは、社員が講師となり物件オーナーなどを対象にした勉強会を開いている。スーモ副編集長の田辺貴久さんは「LGBTへの理解を広めることで、登録件数を増やしていきたい」と話す。

児童扶養手当 2カ月ごとに 厚生省が支給見直し検討 共同通信 2017年8月13日

児童扶養手当支給見直しのイメージ



低所得のひとり親家庭向けの児童扶養手当について、厚生労働省は13日、支給方法を見直す方針を決めた。現在は4カ月ごとにまとめて支給しているが、2カ月ごとにすることを検討している。小まめに受け取れるようにすることで、家計管理を手助けするのが狙い。自治体のシステムを改修し、2019年度にも開始したい考えだ。

児童扶養手当を受給しているのは全国で約104万世帯（15年度）に上る。支給時期は年3回（4、8、12月）で、4カ月分ずつ、まとめて受け取る仕組みだ。

こうした「まとめ支給」には、受給者から「やりくりが難しい」として、見直しを求める声が上がっていた。

妊婦・胎児の状態を遠隔診断、患者が自宅にいても陣痛を把握 阪大が新システム開発、34年にも実用化 産経新聞 2017年8月14日



大阪大学が、妊婦の子宮の収縮状態や胎児の心電図などのデータを遠隔で確認・診断できる新システムを開発したことが13日、わかった。妊婦の腹部に小型センサーを貼るだけで、センサーに搭載した人工知能（AI）が一日中情報収集し、スマートフォンなどを介して医療機関へ送信。通院しなくても、産婦人科医が胎児の健康状態を把握したり、陣痛を診断したりできる。平成34年をめどに実用化を目指す。（板東和正）

手のひらサイズのセンサー

阪大産業科学研究所の関谷毅教授らが、妊婦の腹部に貼る小型センサー（縦約7センチ、横約2センチ、厚さ約6ミリ）を製作した。胎児

の心臓の拍動や、子宮を形成する筋肉の微妙な変化を測定する部品を搭載しており、複数のデータをAIが仕分けする仕組みだ。

センサーは手のひらサイズで、長時間装着しても負担が少ない。1回の充電で約10時間稼働できるリチウムイオン電池を使用する。データは無線通信で妊婦や家族のスマートフォンに送られ、インターネット上のサーバーに蓄積。医師がパソコンなどで確認する。通院負担を軽減

関谷教授らは昨年、阪大の産婦人科医らと共同で臨床研究を開始。複数の妊婦の胎児から心電図の取得や送信に成功した。子宮収縮の測定方法も確立した上で、厚生労働省関連の独立行政法人に医療機器として認可申請する。

産婦人科では通常、妊婦の来院時に専用機器を取り付けるなどして胎児や子宮の状態を確認している。新システムはいつでも確認できるため、妊婦と胎児の安全性を高め、遠方から通院する負担の軽減につながると期待される。実用化後は阪大病院で導入するほか、産婦人科医が不足する過疎地域の出産支援に役立てる方針だ。

大阪大大学院医学系研究科の遠藤誠之講師（産科学婦人科学講座）の話

「特に初めて出産する方は、陣痛が起こる時期などが分からず、いつ病院に行けばいいかわからないケースも多い。妊婦が自宅にいても陣痛を診断できるようになれば、出産の安心感と安全性が高まる」

遠隔医療、大学病院が相次ぎ導入

通信技術の発達に伴って活用が進む「遠隔医療」は、特に地方の患者に多大な恩恵をもたらしている。

東北大学病院（仙台市）てんかん科の中里信和教授は約5年前から、約90キロ離れた気仙沼市立病院（宮城県）とテレビ会議システムで結んで患者を診察。「(仙台まで)数時間かかる患者には大きな助けになっている」と話す。

外科手術でも効果が上がっている。旭川医科大（北海道旭川市）は昨年9月、地方病院のコンピューター断層撮影（CT）画像などを医師らがスマートフォンで共有する取り組みを開始。手術を要する患者が旭川医大病院の手術室に入るまでの時間が平均で約3分の1に縮まったという。

情報流出リスクも

政府は今年4月、遠隔医療の保険適用対象を平成30年度中に拡大する方針を発表した。現在は2回目以降の間診などに限られるが、初回の間診や幅広い診療に広がると予想される。

一方、情報セキュリティの課題もある。東京理科大の平塚三好教授は「もし患者の個人情報流出や医療事故が続けば、データを悪用する犯罪や、被害回復を求める訴訟が後を絶たなくなる。送信時に情報を暗号化するなどサイバー対策を徹底すべきだ」と指摘している。

<NPOの杜>障害ある人も共に働く

河北新報 2017年8月14日

私たちの事務所には1～2週間に1度、「コッペ」というパン屋さんが出張販売に来ます。国産小麦を使用した食パン、菓子パンから、いろいろな味のクッキーなど、毎回何を買おうかと悩みます。

運営するのは、障害のある人も無い人も一緒に働ける場を目指す特例認定NPO法人麦の会。障害者が働くための施設ではなく、普通のパン屋さんにたまたま障害のある人も一緒に働いている、みんな同じ職場の働く仲間です。

もちろん人によって得意、不得意があります。でも、日々作業を繰り返していく中で、その人に合った得意な作業をその人自身がだんだんと見つけていきます。障害があっても、得意な作業は正確に、丁寧な仕事ができるようになるのです。

例えば、働き始めて20年以上になるAさんは、商品ラベルの作成や、注文書の通りに

パンやクッキーを袋詰めする作業のベテランです。

麦の会は、彼らの自立に向けてもっと工賃が支払える運営がしたい！と日々、販売の開拓に努力しています。

パンを買うこともこの活動を応援する形の一つです。お店は仙台市宮城野区松岡町17-1にあります。ぜひ足を運んでみてください。(認定NPO法人杜の伝言板ゆるる 大西直樹)

<南風>兄を中心に

琉球新報 2017年8月14日

私は旧具志頭村生まれ。1男4女の三女です。一番上の姉と14歳違い、兄とは四つ違い、下3人は年子、のすごく仲のいい兄妹です。

兄妹を固い絆で結んだのは兄の存在があったから。兄は出産の時にへその緒が首に巻きつき、脳の障害と肢体不自由で生まれました。両親は共働きなので、兄のことは、できる範囲は姉妹でやりました。

兄は周りの同級生と同じ遊びをするのは厳しく、幼いころ、よく近くの公園へ一緒にブランコ遊びに行ったのを覚えています。兄と同じ小学校へ通い始めた私。友達もたくさんでき、楽しい毎日でした。

たまに障害者の兄をからかう同級生もいました。私より体の大きい兄を守るために、途中にある叔母さんの家を経由して、兄の手を握り帰ったのを鮮明に覚えています。からかわれた時は悔しくて泣きそうになった日もありましたが、学校に行くのが嫌だと思ったことはありませんでした。

私の周りにはたくさんの友達がいたから。何より私の大事な兄だから。不思議と兄を隠すようなことはしませんでした。そうさせたのは両親かもしれません。兄の障害を不幸とってはいけない。この家族なら大丈夫、と選ばれてきたのだから。両親も大変だったでしょうが、兄を中心に動く生活は、私たちにとって当たり前でした。

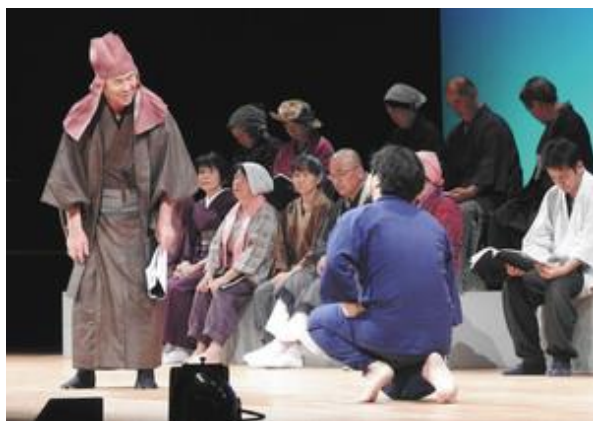
兄が高校を卒業したころ、腎臓病を患って入退院の生活が始まり、家族の生活も変わりました。琉大病院に付き添いで毎日寝泊まりする父に朝食と夕食を届けたり、交代で病院に泊まったりすることも。今思い返しても、父や母は仕事もしながら大変な思いをしていたんだなと思います。

それでも明るい両親で、私たち兄弟を分け隔てなく同じように育ててくれました。下の3姉妹を大学や短大まで通わせてくれたことには本当に感謝です。

(新垣かおり、女子硬式野球沖縄ティードブル マネージャー)

塙保己一の群読劇 本庄公演 熱演に1300人が拍手 東京新聞 2017年8月14日

晩年の塙保己一を演じた山田晴久さん(左)の好演が光った群読劇の舞台=本庄市で



江戸時代の盲目の国学者塙保己一(はなわほきいち)の生涯を描いた市民による群読劇「塙保己一物語」が11日夕、本庄市民文化会館で上演された。コーラス隊を加えた総勢64人の熱演を見ようと、客席は立ち見を含め1300人超の観衆で埋まった。

物語は、武蔵国児玉郡保木野村(現在の本庄市児玉町)の農家に生まれた保己一が7歳で失明し、15歳で江戸へ出てから学

問の道に励んだ生涯を描いた。保己一が約40年をかけて編さんした「群書類従(ぐんし

よるいじゅう)」は古代から江戸初期までの歴史書など約1270種を収録。後の研究の発展に大きな功績を残した。

劇のラストシーンでは、米国のヘレン・ケラーが1937年に来日した際、「子どものころ、母親から『塙先生を手本にしてください』と励まされて育った。塙保己一の名前は流れる水のように永遠に伝わるでしょう」とスピーチする様子を再現。障害がありながら「世のため、後のため」に人生をささげた郷土の偉人の生き方に、会場から盛んな拍手が送られた。

群読劇の脚本を1年がかりで仕上げた会社員根岸久さん(69)は「出演者らの熱演のおかげで素晴らしい舞台になり、労苦が報われた」と話していた。

11月下旬には、同じ脚本を利用する形で幸手中央ロータリークラブが幸手市民による群読劇を計画している。(花井勝規)

『医療者が語る答えなき世界』 磯野真穂著

読売新聞 2017年08月14日

現場の実態 捉え直す

普段、私たちは病院で診察を受ける際、医師に対して何らかの回答を求めるものだ。頭痛や胃の痛み、急な発熱。この体の変調には理由があるはずで、医師はその理由を探り当てて治してくれる、そうであって欲しい、と期待している。

だが、〈病気を「治す」ことが医療の仕事であるというごく当たり前の考えは、かれらの仕事の本質をむしろ見えにくくする〉のではないかと著者は本書で問う。医療の世界には一方で「治らない」現場がいくらかもあるし、医療者の仕事には「治す」ことから遠く離れているように見えるものも多い。また、そもそも「治る」とはどういうことなのか曖昧な場面も頻繁に生じ、彼らは常に答えの出ない矛盾や「不確かさ」に取り囲われている存在なのだから、と。

では、当事者たちはその「不確かさ」を前にしたとき、何を感じ、どのような思いを抱いているのか。病院などを研究フィールドにする文化人類学者の著者は、これを「医療人類学」と呼び、現場で揺らぐ人々の思いや考え方の変化に光を当てる。

終末期医療に携わる新人看護師の疑問、新薬をめぐる医師の葛藤、リハビリ病院の言語聴覚士がたどり着いた境地……。禁止事項を破る患者への対応や高齢患者の身体拘束といった様々な局面で、登場人物たちは医療の限界に直面したり、理想とのギャップに引き裂かれたりした経験を持つ。その一つひとつのケースの「不確かさ」を浮かび上がらせることを通して、迷いながら進むしかない医療者の現実を提示してみせる手法がとても興味深かった。

著者によれば、文化人類学とは〈立ち止まることを奨励する学問〉という。医療者側の常識と患者側の常識のずれ、専門知識としての「医学」と個々の人生の文脈に寄り添う「医療」の可能性―それらを第三の視点から文字通り立ち止まって見つめ、医療現場のイメージを捉え直そうとした意欲的な作品だ。

◇いその・まほ＝国際医療福祉大講師。専門は文化人類学、医療人類学。著書に『なぜふつうに食べられないのか』。ちくま新書 800円



年末調整 「ネットで完結」へ

FNN ニュース 2017年8月14日

紙の書類のやり取りが必要な住宅ローン減税などの年末調整の手続きについて、インターネット上で完結できるようにする方向で、調整されていることがわかった。

サラリーマンの所得税は、企業が毎月の給与から源泉徴収しているが、年末に、企業が過不足を調整し、申告納税の手間を省いている。

ただ、借入残高に応じて税額を減らす住宅ローン減税や、保険料の支払額を所得から差し引ける生命保険料控除を受けるには、サラリーマン自らが、紙の書類を提出する手続きが必要。

新たに財務省などが導入に向け調整している仕組みは、マイナンバーの個人サイトに金融機関から送られてくるデータを勤務先に転送し、企業がネット経由で税務署に提出するというもの。

電子化を通じて、年末調整の利便性を高め、低迷するマイナンバーカードの普及にもつなげたい考え。

社説：買い物弱者対策 公的支援のあり方探れ 京都新聞 2017年8月14日

自宅近くに商店もスーパーもない。公共交通の便が悪く、車の運転も難しい。こんな「買い物弱者」と呼ばれる人々が増えている。

生活必需品が簡単に手に入らない悩みは深い。買い物に行けず、ありあわせの食事で低栄養となる「フード・デザート（食の砂漠）」という現象も問題化している。

ただ、「買い物弱者」には明確な定義がなく、所管する国の省庁もはっきりしていない。実情を把握している自治体も多くない。

農林水産省は買い物弱者を「自宅の500メートル圏に生鮮食料品店がなく、自動車を持っていない65歳以上の人」として、372万人と推計。経済産業省は「日常の買い物を不便と感じている60歳以上の人」で700万人程度とはじく。

数字に差はあるが、見過ごせない人数だ。このままでは生活格差がさらに拡大しかねない。

各地では、地域の実情をふまえた取り組みが進められている。

弁当などの宅配のほか、地元の施設に食料品などを販売する店舗を設けたり、住民有志が買い物用のワゴンバスを運行して高齢者の足を確保している例がある。

京都府北部では、地元のスーパー2社が移動スーパーの営業を始めている。契約した運転手兼販売員の個人事業主が、「とくし丸」と名付けた冷蔵庫付きの軽トラックで希望者宅まで商品を届ける。

訪問先の高齢者に異変が見つければ自治体に通報する見守りの役割も担う。買いすぎる人には注意を促すなど、コミュニケーションにも気を配っているという。

買い物が難しい人にはありがたい試みだが、こうした取り組みで利益は出にくい。総務省が7月に公表した調査では、収支が黒字か均衡しているのは全体の半分弱にすぎず、補助金などで赤字を補てんしている事例もあった。

運営者の努力に頼るだけでは限界がある。国や自治体は詳しい実態調査を進め、効果的な公的支援のあり方を探ってほしい。

取り組みを地域に根付かせる工夫も欠かせない。「とくし丸」は、個人商店の300メートル圏に原則立ち入らないルールを設けている。地元の商売と共存する姿勢は、息長く活動していく上で重要だ。

マイカーなどの利用を前提とした郊外の大型店の進出で、身近な商店は次々と姿を消した。車や公共交通が使えなくなれば、「買い物弱者」はさらに増えていく。

買い物すらままならぬ状況は、生活の質を低下させる。どう救済するか、社会全体の課題である。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

